

企画「列島四十七誌」を開催しました！

令和3年度の図書館ワークスタディの企画として「列島四十七誌～津々浦々、本で巡る日本の旅～」というイベントを企画しました。

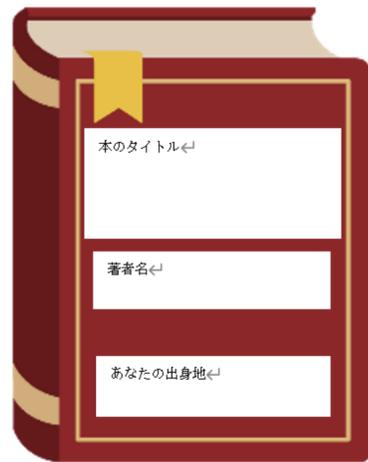
この企画を通して図書館へ足を運ぶきっかけをつくることで、図書館について知り、興味が湧いたり、出身地を通して本について考えることで新たな学びとの出会いになればという思いから企画したものです。

本学では、学生や教職員の地元の違いが特徴的であり、様々な出身地の人との出会いがあります。普段では手に取らないような本に触れてもらうことはもちろんの事、2年という短い期間の中で出会った人の事を知る機会に少しでもなればいいなどの思いを込めて、出身地に関する本について教職員や学生に記入してもらい、「本の日本地図」を作成しました。結果59枚の記入用紙が集まり、右のような展示を作成することができました。お忙しいところご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

記入用紙が集まるか不安な時もありましたが、今しかできない日本地図の形を無事完成させることができ良かったと思います。

図書館では、今後も様々な企画を開催していく予定です。その際には是非足を運んでみてください。

※ワークスタディ：学内アルバイト制度。現在は図書館とキャリアセンターで採用している。



◀メッセージカード記入例

▼展示の様子



図書館だより



背伸びのすすめ

図書・紀要委員会委員長
幼児・児童教育学科教授 春田 淳一



50年も昔のことである。私にも青春時代があった。当時は、札幌の街で世を憂ういっばしの文学青年として、早熟な文学好きな友人たちと、時代の最先端の詩、小説、評論、哲学、社会変革…について憧れをもって見つめ語り合っていた。現在は、店を閉じてしまった富貴堂、なにわ書房や、北大前の古本屋南陽堂、弘南堂を徘徊しては、吉本隆明、高橋和巳、埴谷雄高、小熊秀雄、長田弘…について、まったくわからないものもあったが、わかったふりをして、頭でっかちな青春時代の一時期を過ごした。

今思えば、いつか読むであろうという憧れにも似た、本や作家たちとの出会いの時でもあった。昨今の時代のキーワードとして、「身の丈に合った」とか「等身大」という言葉がもてはやされているが、私は青春時代こそ「背伸び」をすることを勧めたい。現在を生き、未来に生きる若者こそ、一見困難なことと思われることに対して、たとえ未熟で稚拙であったとしても、対象にしっかりと向き合い、考え、思いを巡らせてほしいと思う。今の時代、それが流行らないとするなら、尚のこと学生時代

には、多くの本や作家に出会い、読んでほしい。ぜひ、図書館のドアをあけ、たくさん本と出会ってほしい。本というメディアは、人間が最も長く付き合ってきたメディアである。ぜひ、友人の一人に本を加えていただきたい。頭でっかちと言われてもいい。現実を無視していると揶揄されてもいい。読書を通して、想像し創造する。本の中での背伸びは、誰にも迷惑をかけることはない。

今、小さくまとまっている若者や、意固地に自分の考えのみを主張する若者が多くなったと言われる。こんな時代だからこそ、少し「背伸び」をして考え、行動してほしい。私は、毎年の健康診断で、身長を測るたびに、身長が縮んできている。若いときに背伸びをしすぎた反動かもしれない。

【図書館からのご案内】

○参考図書や館内閲覧に指定されている本は貸出ができません。

○入館する際や貸出手続きの際に学生証・利用証が必要となります。忘れずにお持ちください。

○延滞している場合には、図書の貸出はできません。また、延滞した際には、すべてを返却し終えても、翌日まで貸出不可となります。

※詳しくは利用案内をご確認ください。

【発行】

國學院大學北海道短期大学部図書館

滝川市文京町3丁目1番1号

TEL 0125-23-4111 / FAX 0125-23-5590

<https://www.kokugakuin-jc.ac.jp/>

○開館時間

月一金 9:30—18:30

○休館日

土・日・祝日、大学指定の休日

※新型コロナウイルス感染症により、開館日や時間を変更する場合があります。

國學院大學北海道短期大学部は、高校生以上の地域の皆様に図書館を開放しています。利用ご希望の方は、運転免許証など、ご自身を証明できるものをお持ちのうえ、カウンターで利用登録をしてください。詳細は、図書館にお尋ね下さい。



令和3年度の図書館

令和3年度 蔵書数(令和4年3月31日現在)

合計	和書	洋書	視聴覚
84,603冊	76,567冊	6,904冊	1,132点

和書1,321冊、洋書0冊、視聴覚資料5点を新たに受け入れ、令和4年3月31日までの蔵書数は上記のようになった。

和書の内訳は、固定資産図書44,591冊、教育研究図書31,976冊。洋書は、固定資産図書5,423冊、教育研究図書1,481冊。視聴覚資料は、固定資産188点、簿

外944点となった。

また、年度末に5年間所在が不明である紛失図書や複本、書庫狭隘化のため不要となった図書105冊を除籍した。

私たちの読むヨム

読書嫌いこそ小説を読め！

国文学科 2年 岩崎 友香

私は、本を読むのが苦手だった。細かい文字の羅列を見ると、それを目でなぞるのが面倒で、すぐに本を閉じてしまうし、知らない言葉ばかりで面白くなかったからだ。気まぐれで読んだとしても、集中力の無い私が、最後まで読める本には、なかなか出会えなかった。しかし、中学生の頃、私は一冊の本と出会った。「アニマルゲッター」というタイトルの小説だった。分厚い本だし、小説なので、案の定文字がたくさん並んでいた。最後まで読むことはできないだろうな、と思いながらも、表紙の絵に惹かれ、私はその本を学校の図書館で借りた。私はその本を、なんと一週間で読み終えてしまった。難しい言葉も、物語の続きを読むために調べた。私はこれまで、真面目に本を読もうとしなかったことを、勿体ないと思った。

本は、私たちを、いつでもどこでも別の世界に連れて行ってくれる。紙の上に文字が並んでいて、私たちはそれを目でなぞるだけで、主人公の気持ちに共感してハラハラしたり、物語の展開にドキドキしたりできる。なんと手ごろな没入体験だろうか。そして何より、たくさんの知らない言葉たちに出会える。知らない言葉に出会い、その意味を調べ、使いこなせるようになれば、その分、自分の話す言葉や書く言葉も増える。本は、私たちが使う言葉を豊かにしてくれるのだ。

世の中には、様々な本がある。もちろんそれは、小説だけではない。本は、私たちにたくさんの知識も与えてくれる。確かに今は、インターネットで検索すれば、すぐに答えが出てくる時代かもしれない。しかし、信用できる情報をすぐに手に入れられる手段は、やはり本である。本を読むのが楽しいと感じれば、知識を得るのも、きっと楽しくなる。

もし、これを読んでいる人の中に、本を読むのが苦手な人が居たら、是非、自分が好きになれる本を見つけて、少しでも読書を好きになって欲しい。きっと、あなたが知らない新しい世界が待っているから。



本学に所蔵していない本を読みたいときは、次の方法があります。詳しくは職員までお尋ねください。

①購入希望(リクエスト)を提出する

本学学生・教職員に限りリクエストを受け付けております。ただし、すべての本が入るわけではございませんので、ご了承ください。また、入るまでに時間がかかることがあります。

②他館から取り寄せる

道立図書館などから取り寄せて借りることができます。

③公共図書館・大学図書館に行く

学生証・身分証明書・紹介状などが必要となる場合があります。



『おまじない』を読んで

総合教養学科1年 保田 望愛

私は、ちくま文庫で出版されている『おまじない』という本を読みました。著者は西加奈子さんです。この本は『思い悩む女性たちにそっと寄り添う』をテーマにした短編の物語が8個書かれています。8個の中で特に印象的だったのは『燃やす』という物語です。

『燃やす』を読んでみて、かたちのない言葉は消すことができないので、使い方によっては人間を縛り付けて思うように行動ができないようにしたり、苦しめさせたりすることができるということが分かりました。この物語の主人公である少女も、最初は「女の子だけど男の子みたいな子」「だけど体の成長がきっかけで女の子みたいに可愛くしようと子」として生きていくものの、とある事件にあっけしき、少女の母親の「ほらね!」という言葉がきっかけで「可哀想な子だから男の子みたいにしなさい」と縛り付けられてしまいます。このシーンを読んでみて言葉の影響力は恐ろしいと思いました。なぜなら「ほらね」というたった3文字の言葉でさえ人間を縛り付けたり、苦しめさせたりす

る強力な力を持っているからです。

そしてこのシーンのように言葉で人間を縛り付けたり、苦しめたりさせる行為は誹謗中傷による自殺事件などに当てはまるのではないかと思います。なぜなら誹謗中傷は人間を言葉で傷つけ、苦しみを与えてしまうからです。

私たちは普段の生活の中で常に言葉を話したり、言葉を書き表したりして思いや考えを伝えてきました。しかし使い方によっては、物語の少女のように生き方を縛り付けたり、誹謗中傷による自殺事件などを起こしてしまいます。私たちの生きる世界には様々な人間がいて、様々な思いや考えがあります。お互いを縛り付けたり、苦しめたりしないように、互いの思いや考えを否定せず広い視野を持って受け入れることや、相手を傷つけない言葉の使い方や表現方法がこれからの世界を生きていくためには必要なのだと感じました。

「いじめを考える～教師は子どもの心の治療者になる」

幼児・児童教育学科1年 伊木 真実

2021年、児童生徒の自殺者は過去最多となった。「いじめを考える」(岩波新書・なだ いなだ)を読み、いじめを抑止する方法について考察した。最近いじめが増えてきたというが、いじめは今だけの子どもだけの問題ではない。昔は部落による差別や、女性や子どもに対する社会的ないじめがあった。近年大人の世界でのいじめが減少した理由の一つとして、人権の尊重に関する動きが強まり、いじめが犯罪として法律で裁かれるようになったことがある。

学校でのいじめは、子ども間で権力者が作られ、上下関係が生まれることで発生する場合がある。部活動などで先輩が後輩をいじめることは、これが要因となる。社会の政治体制が王政から民主政治に変わっていき、法が統治することでいじめが減少したように、権力者を置くのではなくクラスでルールを決め、お互いが注意し合うことでいじめの抑止に繋がる。また、学校でのいじめの多くは警察や司法が介入すること

がなく、教師からの指導のみで終わる。しかし、いじめの問題は子どもの命に関わるため、場合によっては大人と同じように法で裁くことも必要だと考える。学校ではいじめという言葉が使われるが、犯罪という自覚を持たせることが重要となる。

いじめは一朝一夕になくなるものではなく、場合によっては警察やカウンセラーなどと協力し、一人ひとりと長期に渡り真摯に向き合うことで少しずつ減らしていけるものだと考える。子どもにとって身近な大人の一人である教師は、子どもの心の治療者であり、子どもの目指す道になることが必要となる。心の治療者となるためには、いじめる子どもの実態を把握し、原因を追究した上で、児童自身が変わろうと思えるように誘導することが教師に必要なことである。自分が人を傷つけていることを自覚させ、それをやめさせなければならない。教師が子どもの心の病気の治療者になることで、いじめの抑止に繋がる。